

2023年10月の選評に代えて 高橋修宏

何処かで (桜望子 山形県)
羽根になることを
願っている
唇に塗るニベア

三行目まではファンタジーめいた願望が表出されているが、四行目「唇に塗るニベア」によって現実に引戻される。幻想と現実を交差させながらも、「ニベア」という商品名によって不思議なリアリティを喚起させた作品。

夏シーツはためく庭を (茉城そう 北海道)
君の影を
とどめておいて
細い額縁

過ぎ去った、かけがえのない夏の点景なのだろうか。あわく、はかなげなイメージを喚起させながら、その点景のフレームとなる「細い額縁」が効いている。

うつくしいお前を祝うためだけに (旭日 百 滋賀県)
あらゆる炎が風に吹かれる

この作では「お前」と呼ばれた者が、いかなる存在なのかは記されていない。しかし、二行目の「あらゆる炎が風に吹かれる」という壮大な措辞によって、何か崇高とも呼べる存在を暗示させる。さまざまに想像させる〈余白〉を、あえて残した一作。

ひと知れず中華の口になっている (松下 誠一 東京都)

一読、美味しい中華料理を連想させるが、どうもそうではないらしい。そもそも「中華」とは、漢民族が世界の中心として自らを考える思想に冠された言葉であり、この一句

の「中華の口」も「ひと知れず」自己中心的になっている振るまいであるのかもしれない。

世界地図、
何度描けど不揃いな
僕らの淡いあの国境線
(源楓香 東京都)

ウクライナであれ、パレスチナであれ、いま現実に行進している戦争の悲惨さは、それぞれの「国境線」をめぐる攻防であることは間違いない。おそらく「何度描けど不揃い」で、しかも「淡い」のは、そんな戦争のためであるのだろう。「僕ら」という一見、弱々しくも感じる主体に込めて、戦争と国境線をめぐる不確かさを記した一作。

十月は蝶を模写する昼休み
(中矢 温 愛媛県)

「十月」とは、その文字のフォルムからも、何らかの象徴的な「月」なのだろうか。すでに春、夏を過ぎた「十月」の「蝶」は、どこか存在感が淡いもの。「模写」の一語が効いている。また、「十月の天使につむじ踏まれたわ」の一句にも、「十月」らしいファンタジーが漂う。

紫陽花と名付けるために犬を飼う
(吉沢 美香 宮城県)

言うまでもなく「紫陽花」とは、梅雨時に咲く花であり、その時期を代表する季語である。だが、この一句では「犬」の名前として表象され、「紫陽花」という季語が実体から浮遊している。季語に対する、ささやかな諧謔、あるいはパロディか。

刺繍して
裏側をなぞる
世界をうつくしく
(こはくいろ 大阪府)

たとえられないまま

この作では、「刺繍」というささやかな振るまいが、世界との接続を呼び出しながらも、ついに「うつくしく／たとえられないまま」中断している。二行目の「裏側をなぞる」の一語は、「刺繍」の裏側であると共に、世界の裏側さえ暗示しているのではないか。

囁きの家に自画像すべて百合 (玻璃 愛媛県)

どこか耽美的な気配が漂う一句。「囁き」、「自画像」、「百合」という言葉の選択は巧みだが、「家に」は「家の」の表記の方がイメージが、より鮮明になったのではないか。「に」の助詞では、どうしても説明に傾いてしまう。

フトーコーフトーコー (日下部 友奏 群馬県) また小鳥来る

カタカナ表記の「フトーコー」が、不登校の意であることは、読後に少し遅れてやってくる。「フトーコー」が二度くり返されることで、二行目の「小鳥」の鳴き声のようにも感じさせるのだ。言葉の表記と音を活用した不思議な味わいの一作。

爆風に撫でられ腕の裂け目から (うたた 岡山県) 骨は初めてひかりを知った

鈴木六林男の戦場俳句に〈射たれたりおれに見られておれの骨〉があるが、この作では「骨は初めてひかりを知った」と客観的に描かれている。かつて〈戦火想望〉と呼ばれる一群の作品があったが、本作もそのようなカテゴリーで捉えてよいだろう。いま、世界中で起きている戦争の悲惨な状況に目を向けるのも、詩歌にとって大事なことのひとつなのだから。

絡まりもつれる弱さの束を
一つひとつ解き編み
一本の縄として身を立てる

(てふの雀 愛知県)

この「一本の縄」とは、作中主体それ自体のメタファーであるのだろう。その「一本の縄」が生成されるまでのプロセスを、微細に言葉を選択しながら、丁寧に描き出している。

寝息のリズムで初めて君を知る

(付玉 薄荷 埼玉県)

友人であれ、恋人であれ「寝息のリズム」は、かなり親密な関係にならないと知ることはできない。だが一方で、「寝息のリズム」によって、「君」との決定的な隔たりを感じてしまうこともあるのかもしれないが――。